1　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、問いの関係で、**図①**～**図③**は本文中には載せていない。また、筆者は親しみを込めて、チンパンジーのことを「一人」「二人」と数え、「男性」「女性」と呼んでいる。

人間とは何か。さまざまな視点から考えてみた。チンパンジーの子どもたちには、人間の大人より優れた記憶能力があることもわかった。[1]では、人間を他者と区別するもっとも大きな特徴はなんだろうか。究極的にいえば、それはイマジネーション、想像するちから、ではないかと思うようになった。

チンパンジーは絵を描く。色を選ばせると、自分で適当に色を選ぶ。まずはチンパンジーが描いた絵を見ていただきたい。**図①**はチンパンジーのアイのなぐりがきだ。けっこう素敵で、気に入っている。荒々しい筆遣いがいい。ほかのチンパンジーが描いた絵も、基本的にはみんな同じで、チンパンジーは具象物（ぐしょうぶつ）を描かない。（した形をそなえているもの）

チンパンジーは、食べ物のような報酬（他人のために仕事をしたことに対して受け取るおれ）がなくても絵を描く。あらかじめ白い紙に丸を描いておくと、それをなぞる。そこまでは私の研究である。そこで、ある大学院生が、とても面白い検査を思いついた。丸をなぞるんだったら、似顔絵はどうかと考えた。チンパンジーの似顔絵を与えてみると、やはり顔の輪郭をなぞった。片目がない絵とか、両目がない絵とか、輪郭のみとか、いろいろなバリエーション（種類）の似顔絵で七人のチンパンジーにやってもらった。すると、基本的にはなぐりがきをするか、**図②**のように輪郭をなぞった。（　a　）、三歳二か月の人間の子どもに、まったく同じことをやってもらうと、そこにないものを描き込んだ。目を描き入れる。二歳までの人間の子どもは、チンパンジーと大差はない。それが、三歳を超えると、**図③**のような絵を描く。さて、これをどう解釈したらよいだろう。

（　b　）、チンパンジーはそこにあるものを見ている。人間はそこにないものを考える、と私は解釈した。そうだとわかると、チンパンジーの子どもが記憶の実験で示した優れた結果が、ぜんぜん不思議ではなくなる。チンパンジーは目の前にある、そのものを見ているのだ。たとえ一瞬とはいえ、たしかに目の前に出てきた。それを一瞬でしっかり見ている。人間はそうではなくて、そこにないものに思いを馳（は）せる。「おめめがないよ。」と言う。そこが[2]大きな違いなのだ。

そう考えると、もう一つ思い当たることがあった。二〇〇六年九月二十六日に、霊長類研究所（サルの仲間の総称）にいる[3]レオという当時二十四歳の男性チンパンジーが、突然、首から下が麻痺（まひ）した。診断は、急性脊髄（せきずい）炎だった。さっそく、若い教員や獣医や飼育員が、大学院生たちをうまく組織して、レオのために、一日二十四時間の看護体制を敷いた。こうした若人たちのボランティアのおかげで、かろうじてレオの命は支えられた。しかし、レオはぜんぜん動けない。そうすると、ひどい床ずれ（病気の名前の一つ）になる。腰や膝（ひざ）の皮膚が破れ、膿（う）み、骨がむきだしになるほどの床ずれだ。五十七キロあった体重も三十五キロにまで減った。やせ細って寝たままの彼の姿を見て、もし、これが自分だったら、とても我慢できないだろうと思った。痛みのつらさに耐えられないのではない。「このまま生きていてもしょうがない。自分はどうなってしまうんだ。」というような心境になるだろう。将来に対する希望がもてず、ただ絶望感にさいなまれる（苦しめられる）だろう。

でも、このチンパンジーは、私であれば生きる希望を失うというような状況のなかでも、まったく変わらなかった。めげた様子が全然ない。けっこういたずら好きな子で、人が来ると、口に含んでいた水をピュッと吹きかける、なんてこともする。キャッと言って逃げようものなら、すごくうれしそうだ。

このレオの事例を見て、思い当たった。人間とは何か。きっと「想像する」という部分が違うのだ。「想像する」ということが人間の特徴だと思った。チンパンジーは、「今、ここの世界」に生きている。だからこそ、瞬間的に表示された目の前の数字を記憶することがとても上手だ。しかし、人間のように、百年先のことを考えたり、百年昔のことに思いを馳せたり、地球の裏側に住んでいる人に関心を寄せるというようなことはけっしてしない。（　c　）、もっと短い時間・空間範囲でなら、チンパンジーも想像することはある。道具を用意してからシロアリ釣りに向かうとか、種割りをする前に台石の向きを調整して水平になるようにするとか、短い時間の範囲では当然未来を予測する。でも、その広がり方は、一年先の収穫を見越して田植えをするというようなものではない。[4]想像する時間と空間の広がり方が違う。それが私のとりあえずの結論だ。（中の実を食べるためにヤシの実などを割ること）

今ここの世界を生きているから、チンパンジーは絶望しない。「自分はどうなってしまうんだろう。」とは考えない。たぶん、明日のことさえ思い煩ってはいないようだ。それに対して人間は容易に絶望してしまう。でも、絶望するのと同じ能力、その未来を想像する能力があるから、人間は希望をもつことができる。どんな過酷な状況のなかでも、希望をもつことができる。

人間とは何か。それは想像するちから。［　A　］のが人間だと思う。

（松沢哲郎『想像するちから―チンパンジーが教えてくれた人間の心』の文章による）

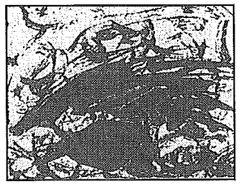
問1　（　　）の部分a～cに入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア　そして　　**イ**　もちろん　　**ウ**　たぶん　　**エ**　ところが　　**オ**　むしろ

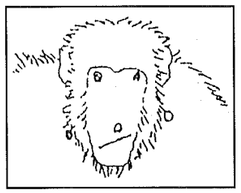
問2　傍線の部分1を文節に分けると、何文節になるか。漢数字で答えよ。

問3　文中の**図①**～**図③**は、次の**(あ)**～**(う)**のいずれかである。その組み合わせとして適当なものを、あとの**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えよ。

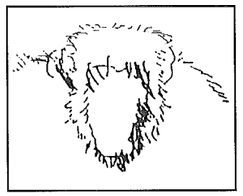
(あ)



(い)



(う)



ア　図①―(あ)　図②―(い)　図③―(う)
イ　図①―(い)　図②―(う)　図③―(あ)
ウ　図①―(う)　図②―(い)　図③―(あ)
エ　図①―(あ)　図②―(う)　図③―(い)

問4　傍線の部分2とは何か、文章の中の言葉を用いて四十五字以内で説明せよ。

問5　傍線の部分3の事例を通して筆者が考えたチンパンジーの特徴は何か。これよりあとの文章から、二十五字以上三十字以内の一文を探し、はじめの五字を書け。

問6　傍線の部分4について、人間の「想像する時間と空間の広がり方」を具体的に述べた箇所を、四十字以上五十字以内で抜き出し、はじめと終わりの三字を書け。

問7　この文章の論の進め方として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　仮説を立て実験を行い、結果について考察する科学実験の手法を用いて、主張を展開している。
イ　対照的な二つの考えのうち、一方の考えの誤りを指摘して、残りの一つの考えを強調している。
ウ　自分の考えの根拠となる具体的な事例を複数紹介することで、主張に説得力を持たせている。
エ　二つの対立する考えを取り上げた上で、両者の対立を乗り越えた新しい考えに到達している。

問8　［　　］の部分Aには、チンパンジーとの比較を通して筆者が考えた人間の特徴が入る。どのような内容が入ると考えられるか。「想像」と「希望」の二語を用いて、三十字以内で書け。

2　高校一年生の「私」は、百キロメートルを歩く大会に参加している。前日の午前八時に出発したあと、他の参加者や大会ボランティアスタッフの支えもあって、なんとか九十六キロメートル地点まで歩いてきた。以下は、それに続く場面である。この文章を読んで、あとの問いに答えよ。

十二時四十分、[1]私たちは立ち上がり、歩きだした。残りは四キロ。残り時間は、あと一時間二十分。[a]最後の四キロは、海沿いの道だった。防波堤沿いにずっと歩いていく。ここは行きに通った道とは違うみたい。

[b]見慣れない道にきょろきょろしながら歩いていると、少し前に、またも見知った背中が見えた。今度は、左足だけじゃなく、右足までかばっているようだ。さてはあいつ、右足の水ぶくれもつぶれたな？

「おーい。」

「またあんたかよ。」振り返った彼は、やっぱり[2]仏頂面のまま言った。

「お友達ですか。」

「途中いっしょに歩いたんです。」宗方さんに説明する。宗方さんは、それを楽しそうに聞いていた。自然と、三人で並んで歩く。

「ここ、ビクトリーロードって言うんだと、親父が言ってた。」彼はだれに言うともなくつぶやいた。すぐ横は海ということもあって、風が強い。

勝利への道……

今回が四回目の参加になる高齢の参加者

「そんな呼び名があるんですか。知りませんでした。」

彼の父は以前この大会に参加したことがある

宗方さんがあいづちを［　A　］。

ビクトリーロード。百キロの最後、そこまで歩いてきた人だけが歩ける海岸線。だれかと勝負したわけじゃない。だれに勝ったわけでもない。体は疲労でくたくただし、足だって痛い。それなのに、心は心地よい達成感に包まれていた。そのとき、ふと思い出した。そういえば、理由を聞いてない。

「宗方さん、『[3]恵みの雨』って呼ぶ理由、教えてください。」

「それ、俺も聞いたことある。」

「ああ、そういえばお話ししてませんでしたね。」ゆっくりと歩を進めながら、宗方さんは話してくれた。

「人は困難が多ければ多いほど、より多くのことに気づくことができる。百キロの最中に、雨が降ったことで、さらに気づくことも増えるでしょう。それに、感謝して、『恵みの雨』と、そう呼ぶんだそうです。」

「そうなんですか……。」

多くのことに気づかせてくれる、雨。確かに、そうかもしれない。雨だけじゃなく、百キロというとんでもない距離を歩かなければ、気づかなかったこと、考えていなかっただろうことはいっぱいあった。正直、三十キロの時点で宗方さんに名前の由来を聞いたとしても、そのころの私はきっと理解できなかったと思う。雨なんて、ただ迷惑なだけ。困難を増やしてどうするの？

でも今は、『恵みの雨』の言葉の意味が、すとんと胸に落ちてきた。長い道のりの途中、あきらめそうになったことなんてなんどもあったし、自分の境遇をただ呪って泣いたことだってあった。今はすべてがなつかしい。心の中のもやもやしたものは消え、ただ感謝だけが胸にあった。

どれほどそうして歩いただろうか。不意にだれかが声を上げた。つられて顔を上げる。するとそこには、たくさんの人と、そして、百キロのゴールがあった。時計を見る。二時十分前だった。

間に合った。私は、私たちは、完歩できたんだ。ほっとした。百キロの間じゅう、ずっと時間の不安と戦っていた。チェックポイントに着くのはいつも制限時間ギリギリだったし、歩いていても不安で仕方がなかった。でも、間に合ったんだ。

最後まで歩きぬくこと

「あんた、なに泣いてんだよ。気持ちわりいな。」

「……うるさいってば。」

ゴールを見たとたん、安心したのか、止めようといくら努力しても、あとからあとから涙があふれてきた。最初は、とうてい無理だと思っていたゴール。途中からやっと百キロという距離がおぼろげに見えてきて、最後には絶対たどり着きたい目標へと変わった、百キロ。それがついに、目の前にある。私ひとりでは絶対になしえなかった完歩。

[d]苦しいとき、必ずだれかが支えてくれた。手を差し伸べてくれた。心が折れてしまいそうなとき、みんなが背中を押してくれた。だからこそ、私は今ゴールに向かって歩くことができる。百キロという長い道のりを、完歩することができるんだ。

「おめでとうございます！」オレンジの服の人たちが、口々に言ってくれた。あたたかな拍手に包まれる。

涙なんて、真夜中にかれたと思っていた。ひとりの夜道で、苦しくて、いらついて、流した涙。それとはまったく違う、あたたかなものが頬を流れていく。

ゴールの瞬間を撮ってくれたけれど、私は万歳をしながら泣きじゃくったままだった。宗方さんも、初めての完歩に目をうるませている。彼も、ゴールで待っていたお父さんと抱き合っていた。

（片川優子『１００km！』の文章による）

問1　波線の部分、a～dの文字を次のように行書で書いたとき、楷書で書いたときと**筆順が変わらないもの**を一つ選び、記号で答えよ。

a 最　b 見　c 感　d 苦

問2　傍線の部分1は、この時点ではだれのことか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　私と宗方さん　　イ　私と彼　　ウ　私と彼と宗方さん　　エ　私と宗方さんとボランティアスタッフ

問3　傍線の部分2の語の意味として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　温厚な顔の様子　　イ　残念そうな顔の様子　　ウ　満足そうな顔の様子　　エ　無愛想な顔の様子

問4　［　　］の部分Aに入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　ならす　　イ　たたく　　ウ　うつ　　エ　ふる

問5　「宗方さん」の人柄の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　水ぶくれをつくりながらも頑張って歩こうと努力する人

イ　年下の相手に対しても丁寧語で話をする誠実な人

ウ　若者をつかまえて説教することが好きなおせっかいな人

エ　完歩するたびに涙を流してしまう感激しやすい人

問6　傍線の部分3について、大会中に降る迷惑な雨のことを、なぜ『恵みの雨』と呼ぶのか。二十字以内で書け。

問7　百キロのゴールを目にしたときの「私」の気持ちを、文章の中の言葉を用いて六十字以内で説明せよ。

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今はむかし、物ごと自慢くさきは未練の[1]ゆゑなり。物の上手は、すこしも自慢はせぬ事なり。我より上手の者ども、広き天下にいかほどもあるなり（まだ熟練していないこと）ある者座敷を立てて、ふすまの絵を描かする。しらさぎの絵を望む。絵描き、「[2]心得たり。」とて焼筆をあつる。亭主のいはく、「いづれも良ささうなれ（焦つて……）（筆で下書きを描いた）（えがかせた……）（鳥の一種……）ども、このしらさぎの飛びあがりたる、羽づかひがかやうでは飛ばれまい。」といふ。絵描きのいはく、「いやいやこの[3]飛びやうが第一の出来物ぢや。」といふうちに、本のしらさぎが四、五羽うちつれて飛ぶ。亭主これを見て、「あれ見たまへ。あのやうに描きたいものぢや。」といへば、絵描き（このようでは飛べないだろう……）（最もすぐれた点……）（本当の）

[4]これを見て、「いやいやあの羽づかひでは、それがしが描いたやうにはえ飛ぶまい。」といひけり。（私……）（飛べないだろう）

（『浮世物語』の文章による）

問1　傍線の部分1の読みを、現代仮名遣いで書け。

問2　傍線の部分2の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　得をした　　イ　安心した　　ウ　承知した　　エ　注意した

問3　傍線の部分3とほぼ同じ意味の言葉を、文章の中から五字以内で抜き出して書け。

問4　傍線の部分4は、何を見たのか。簡潔に説明せよ。

問5　第一段落と第二段落はどのような関係になっているか。次のア～エの中から、それぞれの段落のはたらきの組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　主張と理由　　イ　主張と具体例　　ウ　主張と補足　　エ　主張と反論

問6　この文章の筆者は、登場人物の一人を批判的にえがいている。だれの、どのような態度を批判しているか、三十五字以内で説明せよ。

4 次の文章は、新聞の投書欄に掲載された文章である。この投書を読んであなたが考えたことを、あとの注意に従って書け。なお、投書の見出し、投書した人の名前、職業、居住地、年齢は省略してある。

地上波テレビ放送は岩手、宮城、福島の三県を除いてデジタル放送化したが、わが家はまだデジタル化していない。まだというか、しばらくはしないと思う。

五年ほど前にテレビが故障してからテレビがない生活を送ってきた。小学六年生と二年生の娘たちも内心は見たいのかもしれないが、テレビを超える楽しさを味わっている。ゆっくり新聞を読む時間も、本を読む時間も、工作をする時間も、テレビのスイッチを切ってからはたくさん生まれている。子どもたちの発想力や構想力が立体的で奥行きのあるものになってきているような気がする。

もちろん、テレビに優れた内容の番組があることも、生活の中でテレビを必要としている人がいることも理解している。しかし、テレビを見ないと決めれば、わからないことや疑問に思ったことを書物や新聞の世界に探ったり、試行錯誤を繰り返しながら問題を解決したりする力は身につくであろう。だから、私はしばらくは地デジ化の流れに反して、テレビのない生活を続けてみたいと思う。

（平成二十三年八月二十一日　朝日新聞「声」による）

注意
1　本文は二段落構成にし、十行以上、十二行以内で書くこと。
2　第一段落には、投書の内容を簡潔にまとめて書くこと。文章を書くときは、「投書の筆者は」と書き始めること。
3　第二段落には、第一段落に書いたことと関連付けて、あなたの考えを書くこと。
4　題名や氏名は書かないで、直接本文から書き始めること。
5　原稿用紙の正しい使い方に従い、文字や仮名遣いなどを正しく書くこと。また、漢字を適切に使用すること。

2

問7　問6　問5　問4　問3　問2　問1

1

問8　問7　問6　問5　問4　問3　問2　問1

a

b

文節

c

4

3

問6　問5　問4　問3　問2　問1